

編 集 後 記

昨今はあちこちの外科系学会で外科医不足の問題が取り上げられている。現在、日本外科学会の新規入会者数は年間約800人しかおらず、外科医全体の高齢化も急速に進んでいる。その大きな理由としては、労働条件が厳しい、訴訟のリスクが高い、賃金が少ないなどが挙げられており、外科を志望する医学生が急速に減少している。外科医の減少に歯止めを掛けるべく、厚生労働省は医学部の定員を増員し、さまざまな学会や団体が外科医の労働条件や待遇の改善を目指して活動を展開している。確かに、日本医師会のTVCMに見られるような厳しい労働環境を外科医であれば誰もが過去には経験している。しかし、労働時間や報酬だけがすべてだろうか。医師の数を増やしたところで、都市部、人気のある病院・診療科への医師の偏在にますます拍車がかかるだけである。我々が外科医を志した時代には、外科は今よりも遙かに厳しい世界であり、収入もほとんど無に等しかった。それでも多くの医師が外科医を志望したのには、外科という診療科に大きな魅力があったからに他ならない。それではどうして現在の医学生に外科の魅力が伝わらなくなったのだろうか。その理由の一つは卒前、卒後教育システムにあると考えている。現在、日本全国のほとんどの医学部において、6年生は数か月の短期間の臨床実習の後、講義や自習中心のいわゆる医師国家試験対策に終止している。その後、学生実習の延長のような卒後臨床研修を経て専門科を決定する。医学部の5年生で初めて臨床実習に出て、多くの感動を臨床の場から得られたにもかかわらず、また予備校のような生活を強いられ、晴れて医師国家試験合格後も、満足に仕事もできないのに権利だけは主張できる環境に置かれることに問題があると思われる。文部科学省と厚生労働省が連携し、現在の卒前・卒後教育システムを改善していただければ、より純粋な気持ちで専門科を選択する医学生が増えるのではないだろうか。現在の外科は決して魅力のない診療科ではないと断言できる。

本号では2編の原著論文、16編の症例報告、3編の臨床経験が掲載されている。相変わらず症例報告が中心ではあるが、原著論文や臨床経験も増加傾向にある。国内学会の英文誌が次々と impact factor を上げているなか、邦文の学会誌として厳格な査読を実施している本会誌の存続意義は大きいと感じている。Online化、ペーパーレス化が進んでいるが、希望に満ちた若い外科医が投稿してくれる貴重な論文を何とか掲載してあげられるように、今後も心を込めて査読していきたい。